TOP MUSEUM

東京都写真美術館ニュース
eyes92

巻頭

長島有里枝
そしてひとつまみの
皮肉と、愛を少々。

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2017 Vol.92

長島有里枝インタヴュー

Nagashima Yurie
And a Pinch of Irony
with a Hint of Love

長島有里枝 そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。

上)〈empty white room〉より、1994年 発色現像方式印画 作家蔵
下)〈家族〉より、1994年 発色現像方式印画 作家蔵

《Self-Portrait (Brother #34)》、1993年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

このたび東京都写真美術館は長島有里枝の個展を開催します。90年代より「家族」や「女性」のステレオタイプなイメージを揺さぶる作品を世に送り出してきた彼女。私的な経験と社会についての考察とが分かちがたく結びついた表現は、共同制作や文筆活動など新しい試みを取り入れながら、さらに広がりを見せつつあります。デビュー作から最新作までが一堂に会する個展を前に、お話をうかがいました。

— 今回の展示は四半世紀にわたるキャリアが凝縮された内容になっていますね。

回顧展を、というお話だったので、昔のネガを全部ひっくり返して大変でした。初期の作品は大学を卒業してアメリカに行く前かなり捨てていて、もう無いものもたくさんあります。

— 武蔵野美術大学在学中にパンキッシュなセルフポートレイトや家族揃ったヌード写真で強烈なインパクトを与え、若い女性写真家に注目が集まる流れを先導しました。

写真家になりたいというよりアートをやりたかったので、現代美術の公募展に応募しました。2015年に「ガーリーフォト」についての論文を書いたとき調べたら、初期の作品は、はじめ紹介される際に「女子大生ヘアヌード」と呼ばれていました。確かに学生でヌードではあるんですけれど、当時流行していたヘアヌード写真に対抗するヌードが撮りたくてやっていました。

「女の子写真」という言葉が生み出されるまで、雑誌で取り上げられるときは「美大生」とか「現役女子大生」と書かれました。「アーチスト」という肩書きも、ある日を境に「写真家」になりました。ヒロミちゃん(HIROMIX)や蜷川実花さんが注目されると、多くの女性写真家は「女の子写真」と括られるようになりました。当時のインタビューを読むと、わたしはその状況を面白がって、茶化している感じでした。

メディアは持て囃しても、ほとんどのことは思い通りにいかなかった。もちろん仕事も来ないし。来るのは「映画の主演しませんか」とか、被写体として「見られる側」のオファーばかりで、そういうのは断ってました。

— 90年代後半はアメリカで過ごされていますね。

最初シアトルに行って、それからLAのカリフォルニア芸術大学に。友達の半分はセクシャル・マイノリティだし、先生もレズビアンという環境で、フェミニズムには特に力を入れている学校でした。アメリカでは、わたしが日本でやってきたことの受け取られかたも全然違った。バックグラウンドが違う人たちに自分の作品を説明する難しさを肌で感じたとき、「作品ってそれが生まれる社会のありかたが反映されるものなんだ」ということを考えました。

— 現在は日本で子育てをしながら作品の制作を続けています。出産は大きな転機になったとおっしゃっていますね。

息子の存在や彼との関係性よりも、自分が社会の中で演じなきゃいけない「お母さん」という役割、その大変さに、もう本当に打ちのめされたというか。やっぱり単純な話、アメリカに留学していた父親がちょこっと帰ってきて、そのときだけ赤ちゃんを抱っこひもで連れていると、知らないおばさんに「いいお父さん」って道端でほめられる。わたしは毎日それをやっているけれど、一度もほめられたことないな……みたいなこととか。わたしが世帯主です、と市役所で言うと、話がこんがらがってしまったり、「変だなあ」と思うことばかりで。母親という役割を引き受けてからは、作品を作るときの意識がだいぶ変わりました。

— 祖母が人知れず撮影していた庭の写真を使った〈SWISS〉をはじめ、あまり表に出てこなかった女性の創造性や存在そのものに光をあてるプロジェクトに取り組んでいますね。現在のパートナーの母親と

《わたしたちの部屋（朝）》、〈SWISS〉より、2007年 発色現像方式印画
東京都写真美術館蔵

タープを、実母とテントを共同制作するなど、布を使ったインスタレーション作品も、また一歩踏み込んで関係を築こうという試みです。

家庭に入っても何かを作り続けている女の人って本当にたくさんいるんです。祖母も日々、花を撮っていました。その行為は誰にも評価されなかったわけですが、それは彼女が男じゃなかったことと密接に結びついていると思います。彼女には、外で働くという選択肢そのものがなく、もっと言えば、初めは参政権もなかったんです。

いま、そういうことがすっかり忘れ去られていて、テレビや雑誌が提示する母親像も「綺麗でオシャレでかっこいい」みたいなことで覆い尽くされています。実際は、主婦業も母親業もかなりきつい仕事で、きれいごとではやっていけない。結局、女性はいつでも男の都合がいいように美しくあることを求められていて、癪（しゃく）ですね。さまざまな経験を経てあるいまを、そのまま美しいものとして受け入れる姿勢を、写真では貫きたい。だから、セルフポートレイトだったら「いいね」がもらえそうな「見せられる」すっぴん顔より、疲れ切ってブスな「いい顔」を選びます。

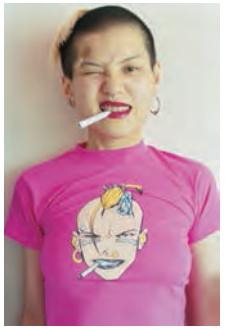
— 息子さんも高校生になられたとのことで、日々の暮らしも変わっていきそうです。今後やってみたいことはありますか。

先のことはわからないな……いまはこの展示のことで頭がいっぱいで。でも、その、みなさんもたぶんそうだと思うんですけど、居心地がいいことが大事ですよね。「みんなは何のために生きてるのかな」って、たまに思うときがあって。中2病みたいですけど（笑）。変な話、わたしは気になることがあると質問したり、意見したりせずにいられなくて、議論になることもあるから、そういう人だと思われてないかもしれないけれど、ただ、楽しくいたいです。話し合おうとするのも、最終的にすっきり、楽しくありたいからで。服装も「ハイヒールで足が痛くても女の特権だから楽しい」みたいに思えないから、しないだけ。フェミニズムだからじゃないですよ。やりたいことがすごくあるというより、イヤなことをやりたくないという強い気持ちだけでここまできた気がします。今後もきっと、それを続けていくだけかな。

生活が大変だと人にあたったり、これ何のためにやってるんだろう、なんでもっと楽しいと思えないんだろう、と思う。それを自分のせいにして落ち込んだりしていたときもあったけど、「なんでこんな風にわたしが思ったりするような世の中の仕組みなんだろう」といまは考えます。面倒くさがりなのに「変えたい」と思うのは、そのほうがきっと、誰しも楽だろうと思うからかな。ひとりで変えられるとは思わないけれど、仕事を通じて、まずは自分が言わなきゃ始まらない、とは思っていますよね。

（2017年7月／インタヴューと文　野中モモ）

《Rose and Wood Turner》、〈家庭について／about home〉より、2015年
発色現像方式印画 作家蔵 表紙は部分



左）《Tank Girl》、1994年 発色現像方式印画 作家蔵／中央）《Matt in Vertical Ramp》、1996年 ゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵
右）《母、息子、犬》、〈Family Portrait〉より、2005年 発色現像方式印画 作家蔵

長島有里枝 そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。

Nagashima Yurie
And a Pinch of Irony with a Hint of Love

2F 2017.9.30｜土｜–11.26｜日｜

デビュー以来、長島は社会における「家族」や「女性」のあり方への違和感を作品で問い続けてきました。ラディカルさとしなやかさをあわせ持つ、パーソナルな視点にもとづいた長島の表現は、若い世代を中心に支持され、国際的にも評価が高まっています。長島は大学在学中の1993年、家族とヌードで撮影したセルフ・ポートレイトで「アーバナート#2」展パルコ賞を受賞し、一躍注目を集めました。2001年には、写真集『PASTIME PARADISE』で第26回木村伊兵衛写真賞を受賞。近年では、自身の幼少期をモチーフにした短編集『背中の記憶』で、2010年に第26回講談社エッセイ賞を受賞するなど、写真以外にも活動の幅を広げています。公立美術館で初めての個展となる本展では、初期を代表する〈セルフ・ポートレイト〉や〈家族〉、90年代のユースカルチャーを切り取った〈empty white room〉のシリーズに始まり、アメリカ留学中の作品、2007年にスイスのアーティスト・イン・レジデンスで滞在制作をした植物の連作、女性のライフコースに焦点を当てた新作までを一堂に展示します。作家の「今」が色濃く反映された現在の作品とともに、これまでの歩みを振り返り、パーソナルかつポリティカルな視点にもとづく写真表現の可能性を探ります。

関連イベント　作家とゲストによる対談

[日時] 2017.10.8（日）14:00–15:30
[出演] 野中モモ（ライター、翻訳家）×長島有里枝

[日時] 2017.11.5（日）14:00–15:30
[出演] 志賀理江子（写真家）×藤岡亜弥（写真家）×長島有里枝
[会場] 東京都写真美術館 1階スタジオ　[定員] 各日50名
※当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日14:00より。展覧会チケット（当日消印）をご持参ください。

PROFILE
長島 有里枝

1973年、東京生まれ。1995年、武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。1999年、カリフォルニア芸術大学にてMaster of Fine Arts取得。2015年、武蔵大学人文科学研究科前期博士課程修了。1993年、「アーバナート#2」展でパルコ賞を受賞しデビュー。2001年、写真集『PASTIME PARADISE』（マドラ出版、2000年）で、第26回木村伊兵衛写真賞受賞。2010年、『背中の記憶』（講談社、2009年）で第26回講談社エッセイ賞受賞。写真集に『SWISS』（赤々舎、2010年）、『5 Comes After 6』（マッチアンドカンパニー、2014年）など。

[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞　[助成] 芸術文化振興基金　[協賛] 株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン／東京都写真美術館支援会員
[観覧料] 一般 800（640）円／学生 700（560）円／中高生・65歳以上 600（480）円 ※（ ）は20名以上の団体料金 ※都民の日（10.1（日））は入場無料

事業内容は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。

総合開館20周年記念 20 Year Anniversary

荒木経惟 センチメンタルな旅 1971－2017－

ARAKI Nobuyoshi Sentimental Journey 1971-2017-

2F 2017.7.25｜火｜－9.24｜日｜

〈センチメンタルな旅〉より 1971年 ゼラチン・シルバー・プリント

荒木経惟は、1960年代から活動を始め、国内外で高い評価を得ています。本展は、荒木の膨大な作品群から、妻「陽子」というテーマに焦点をあてた展覧会です。1960年代の出会いから1990年の死に至るまで、陽子はもっとも重要な被写体であり、死後もなお荒木の写真に多大な影響を与え続けています。陽子を被写体とする写真や、その存在を色濃く感じさせる多様な作品1320点から、荒木の写真の神髄である「私写真」について考えます。

関連イベント 朗読会＋トーク

荒木経惟の作品についての詩を作者自らが朗読します。
[出演] 吉増剛造（詩人）、朝吹真理子（作家）
[日時] 2017.9.16（土）14:00 -16:00 詳細はホームページをごらんください。

ゲスト・キュレーター／当館担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日14:00より、ゲスト・キュレーター／担当学芸員による展示解説を行います。展覧会チケット（当日消印）をご持参ください。

[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／産経新聞社 [協賛] 株式会社資生堂／東京都写真美術館支援会員
[協力] 株式会社写真弘社
[観覧料] 一般 900（720）円／学生 800（640）円／中高生・65歳以上 700（560）円 ※（ ）は20名以上の団体料金 ただし、8月25日（金）の18:00-21:00はサマーナイトミュージアム割引（学生・中高生無料／一般・65歳以上は団体料金、各種割引の併用不可）※9月18日（月・祝）は65歳以上は無料

総合開館20周年記念 TOPコレクション

コミュニケーションと孤独 ー 平成をスクロールする 夏期

20 Year Anniversary TOP Collection: Scrolling Through Heisei Part 2 Communication and Solitude

3F 2017.7.15｜土｜－9.18｜月・祝｜

中村ハルコ〈光の音〉より 1993-98年 インクジェット・プリント

メールやインターネットの普及、個人情報保護、コミュニケーション障害や孤独死など、おもに平成に起き始めた現象により、他者とのコミュニケーションのはかり方、人やものとの距離の取り方は変化し、複雑化が進んでいます。本展では、当館コレクションから、平成年代に制作された作品をご紹介しながら、時代とともに変化してきたコミュニケーションのありかたを考えます。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日16:00より。
展覧会チケット（当日消印）をご持参ください。

スタンプラリー開催中！詳細はコチラ

[主催] 東京都 東京都写真美術館 [協賛] 凸版印刷株式会社
[観覧料] 一般 500（400）円／学生 400（320）円／中高生・65歳以上 250（200）円 ※（ ）は20名以上の団体料金 ただし、8月25日（金）の18:00-21:00はサマーナイトミュージアム割引（学生・中高生無料／一般・65歳以上は団体料金、各種割引の併用不可）※9月18日（月・祝）は65歳以上は無料

エクスパンデッド・シネマ再考

Japanese Expanded Cinema Revisited

B1F 2017.8.15｜火｜－10.15｜日｜

松本俊夫《つぶれかかった右目のために》1968年
マルチプロジェクション（16ミリフィルムより変換） 東京都写真美術館蔵

「エクスパンデッド・シネマ（拡張映画）」は、従来の映画館等でのスクリーンへの投影とは異なった方法で上映される映画です。マルチプロジェクションやループ上映、ライヴ・パフォーマンスの先駆けとなるもので、1960年代半ば頃から欧米を中心に、美術家や実験映像作家によって展開されていきます。本展では、日本の作品に着目し、独自性と先見性に満ちた60年代の実験を、現代の技術によって忠実に再現する画期的な試みです。

出品予定作家

飯村隆彦、シュウゾウ・アヅチ・ガリバー、おおえまさのり、松本俊夫、城之内元晴、真鍋博、佐々木美智子 ほか、日本のエクスパンデッド・シネマの歴史的資料を多数紹介します。

関連イベント

8ミリ自家現像ワークショップ

8ミリフィルム（モノクロ）での撮影から現像、上映までを全2日間で行う制作ワークショップです。
[日時] 2017.9.23（土・祝）、24（日） 各日10:15-19:00
[定員] 12名（事前申込制、応募者多数の場合は抽選）
[会場] 1階スタジオ [参加費] 5,000円

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日16:00より。展覧会チケット（当日消印）をご持参ください。

第10回恵比寿映像祭・国際シンポジウム インヴィジブル、インターメディア、エクスパンデッド－映像の可能性（仮称）

来年2月開催の「第10回恵比寿映像祭」を記念し、展示を読み解くための、国際シンポジウムをプレイベント企画として開催します。
2017.10.9（月・祝）14:00-17:00（13:45開場）
詳細はホームページをごらんください。

[主催] 東京都 東京都写真美術館 [協賛] 凸版印刷株式会社
[観覧料] 一般 600（480）円／学生 500（400）円／中高生・65歳以上 400（320）円 ※（ ）は20名以上の団体料金
ただし、8月25日（金）の18:00-21:00はサマーナイトミュージアム割引（学生・中高生無料／一般・65歳以上は団体料金、各種割引の併用不可）※9月18日（月・祝）は65歳以上は無料 ※都民の日（10.1（日））は入場無料

写真新世紀 東京展 2017

NEW COSMOS OF PHOTOGRAPHY

B1F 2017.10.21｜土｜－11.19｜日｜

第40回公募審査風景

「写真新世紀」は、1991年の発足以来、国内外で活躍する優秀な写真家を多数輩出、新人写真家の登竜門として広く知られています。今年は第40回目の公募を実施。応募者1,705人の中から厳正な審査を経て、優秀賞7名、佳作11名が選出されました。
本展では、それら受賞作品をご紹介するほか、昨年のグランプリ受賞 金サジの新作個展も開催します。フレッシュで力強い作品の数々をお楽しみください。

[主催] キヤノン株式会社 [共催] 東京都写真美術館
[観覧料] 入場無料
◎お問い合わせ》キヤノン（株）写真新世紀事務局03-5482-3904
◎ホームページ》http://global.canon/ja/newcosmos/

総合開館20周年記念 TOPコレクション

シンクロニシティ
ー平成をスクロールする 秋期

20 Year Anniversary TOP Collection: Scrolling Through Heisei Part 3 Synchronicity

3F 2017.9.23|土・祝|- 11.26|日|

原美樹子《Untitled》〈発語の周縁〉より 2004(平成16)年 発色現像方式印画

大森克己 〈サルサ・ガムテープ〉より 1997(平成9)年 発色現像方式印画

TOPコレクションは、毎年一つの共通テーマで、三期にわたって東京都写真美術館のコレクションを紹介する展覧会シリーズです。リニューアル・オープン後最初となるシリーズのテーマは「平成」。秋期は「シンクロニシティ」をキーワードに、私たちの生きている場所、この時代とその表現を見ていきます。「シンクロニシティ」とは、同時に起こるばらばらな物事が一致したり、共通したりする現象を言います。本展は多様な表現傾向をもった平成の作家たちが伝えるそれぞれのリアリティと、その響き合いに焦点を当てます。モダニズムという「大きな物語」やマス・コミュニケーションの力が減退するにつれて、私たちが「現実」と呼んでいるこの世界の在りようとそれをめぐるイメージは変容してきました。平成の時代の写真作品は、「現実」のあいまいさや多義性を様々な視点から、小さな「現実」や小さな「物語」として描き出してきたと言えるでしょう。90年代以降、四半世紀を超える時の流れの中で、作家たちはどのように、この不確かな時代と関わり、それぞれのもつ世界観を作品にしてきたのでしょうか。34,000点を超える収蔵作品から現代日本の写真作品をセレクトしてご紹介します。

関連イベント

じっくり見たり、つくったりしよう!

出品作品に写っているものについて参加者全員で対話をしながらじっくり鑑賞したあと、簡単な写真制作を行います。※作品解説ではありません。
[日時] 2017.10.22(日)、11.19(日) 各日10:30–13:00
[対象] 小学生とその保護者(2人1組) [定員] 各日10組。事前申込制、先着順。
[参加費] 800円(別途本展覧会チケットが必要です)

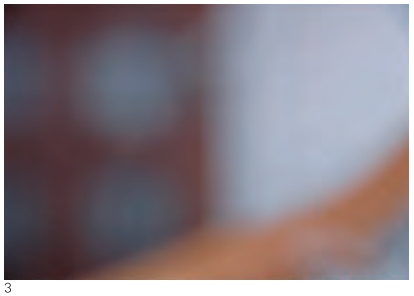
視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。
[日時] 2017.11.3(金・祝) 10:30–12:30 [対象] どなたでもご参加いただけます
[講師] 視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ
[定員] 14名(事前申込制、応募者多数の場合は抽選)
[参加費] 500円 ※申込方法などの詳細は、当館ホームページでお知らせします。

[主催] 東京都 東京都写真美術館 [協賛] 凸版印刷株式会社
[観覧料] 一般 500(400)円/学生 400(320)円/中高生・65歳以上 250(200)円 ※( )は20名以上の団体料金 ※都民の日(10.1(日))は入場無料

1

2

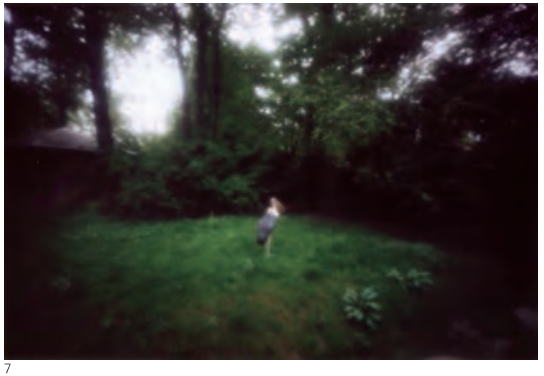


3

4

5

6



7

1)米田知子《平和記念日・広島》〈積雲〉より 2011(平成23)年 発色現像方式印画
2)川内倫子《Untitled》〈うたたね〉より 2001(平成13)年 発色現像方式印画
3)浜田涼《201611明るい部屋》〈とぼとぼと〉より 2016(平成28)年 発色現像方式印画
4)蜷川実花《flowers》(部分) 2015(平成27)年 発色現像方式印画
5)新井卓《2011年7月25日、飯舘村飯樋》〈Here and There−明日の島〉より 2011(平成23)年 ダゲレオタイプ
6)金村修《Untitled》〈Clashlanding in Tokyo's Dream〉より 1991(平成3)年 ゼラチン・シルバー・プリント
7)野口里佳《Marabu #2》2005(平成17)年 発色現像方式印画

開催中

また来たくなるTOPスタンプラリー

「TOPコレクション 平成をスクロールする」展を観覧してスタンプを集めると、素敵なオリジナルグッズがもらえます。スタンプカード配布は9月18日(月・祝)まで。詳細はホームページまたはコチラから▼

※事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1、第3金曜日16:00より。展覧会チケット(当日消印)をご持参ください。

日本の新進作家vol.14

増殖する共振：無垢と経験の写真（仮称）

resonance vortex : photography of innocence and of experience（tentative）

2F 2017.12.2｜土｜－2018.1.28｜日｜

「日本の新進作家」展は、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するため、新しい創造活動の展開の場となる展覧会です。14回目のテーマは「共振」です。昨今、同テーマの展覧会は多く開催されていますが、本企画では特に写真・映像が時間を超えて表現し得るものの強度と普遍性に焦点をあて、地域や世代を超えて響き合うもの、個人の中でも過去と未来をつなぎ、増幅しながら展開していくことについて考察します。サブタイトル「無垢と経験の写真」は、18世紀のイギリスの詩人であり、画家であるウィリアム・ブレイクの『無垢と経験の歌』に由来します。本展では、情報過多となった現代社会の中で、純粋な個々人の経験を写真作品として多様なアプローチで削りだし、視覚化している現代の作家たちの表現を紹介します。これらの経験が見る者を通して共振し影響し合い、増殖して大きな渦となっていく過程で何が起きるのか、またそこで伝え合うものは普遍的な原理をはらんでいるのか等の問題について、制作する側の作家と鑑賞者、双方の視点から考察します。

片山 真理　かたやま まり

1987年埼玉県生まれ、群馬県育ち。幼少期より裁縫に親しむ。9歳の時、先天性四肢疾患により両足を切断。群馬県立女子大学文学部美学美術史学科卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻、修了。手縫いの作品や装飾を施した義足等と共にセルフポートレイトを制作。あいちトリエンナーレ（2013年）、「六本木クロッシング」（森美術館、2016年）等。2011年より特製のハイヒールを履き、歌手やモデルとしてステージに立つ「ハイヒールプロジェクト」を実施。その他、講演、執筆など活動は多岐にわたる。

《小さなハイヒールを履く私》2011年 発色現像方式印画 ©Mari Katayama

鈴木 のぞみ　すずき のぞみ

1983年埼玉県生まれ、東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業後、東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修士課程を経て、現在、博士後期課程在籍。2012年頃より、アトリエ兼自宅の中で、扉の鍵穴や引出し等、生活環境の中の「穴」を利用したピンホール印画の作品を制作。取り壊される家や不要となった窓を枠ごと保管し、窓ガラスが映していた風景を記録する作品等でアートアワードトーキョー丸の内2015フランス大使館賞やVOCA展2016奨励賞等を受賞。制作は、コーヒードリッパーや鍋の穴を用いたピンホール作品や、実際に使用していた鏡に映していたであろう人や風景を印画した作品など多岐に及んでいる。

〈Other Days, Other Eyes〉より《久仁屋工場2階の窓》2013-17年、窓ガラスに写真乳剤 ©Nozomi Suzuki Courtesy of rin art association（撮影：木暮伸也）

[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞　[協賛] 東京都写真美術館支援会員
[観覧料] 一般 700（560）円／学生 600（480）円／中高生・65歳以上 500（400）円　※（ ）は20名以上の団体料金

金山 貴宏　かねやま たかひろ

1971年東京都生まれ、1993年渡米。NY市立大学シティカレッジ、スクール・オヴ・ヴィジュアルアーツ大学院を経て、ICPドキュメンタリー学科在籍中からフリーランスの写真家として活動。「Making a Home: Japanese Contemporary Artists in NY」展（Japan Society, NY, 2007-08年）等で注目され、特に『While Leaves are falling…』（2016）の写真集（赤々舎）、展覧会（新宿ニコンサロン）は数々の賞にノミネートされている。このシリーズは作家が20歳の時、実母が統合失調症を発症。言動が全く別人のようになり、入院生活を送る実母と2人のおば（実母の姉妹）の記録である。作家がNYから帰国し、4人旅を繰り返す、現在進行形の作品群。

〈While Leaves are falling…〉より《家族 箱根にて》2009年
インクジェット・プリント ©Takahiro Kaneyama

吉野 英理香　よしの えりか

1970年埼玉県生まれ、1989年から写真作品の制作を開始し、1994年に東京綜合写真専門学校を卒業。写真家 鈴木清の影響を受けながら、日常的な風景を撮り続け、モノクロ作品を制作。2010年からカラー作品の制作を開始し、2011年に『ラジオのように』（オシリス）を発表、その言葉に尽くしがたい独特の雰囲気が評価される。「Polypolis: Art from Asian Pacific Megacities」（ハンブルク市美術館、2001年）、「Black Out: Contemporary Japanese Photography」（ローマ日本文化会館他、2002年）等の国際展に参加。2016年、撮りためた大量の作品から抽出して編んだ写真集『NEROLI』（赤々舎）が注目される。
※「NEROLI」は大量のビターオレンジの花から、ほんの少量抽出されるフラワーエッセンス。

〈NEROLI〉より《Untitled》2013年 発色現像方式印画 ©Erika Yoshino Courtesy of Taka Ishii Gallery　Photography / Film

武田 慎平　たけだ しんぺい

1982年に両親の故郷、福島県で生まれ、千葉県で育つ。2002年以降NYで写真制作を行うかたわら、ビデオ・アーティストとして作曲家等とコラボレーションを中心とした制作活動を行う。近年、カメラを使用せず制作するフォトグラム作品を手がける。東日本震災後、名所や旧跡の土を用い、放射線で感光させたフォトグラム作品〈Trace（痕）〉が高く評価され、「A Different Kind of Order: The ICP Triennial」（ICP、NY、2013年）、「In the Wake」（ポストン美術館他、2015年）等多数の国際展に参加。2014年帰国、2015年より宮城県仙台市在住。現在、自然環境の様々な要素から制作する新シリーズ〈Glaze（釉）〉を制作中。

〈Trace（痕）〉より《#7 二本松城》2012年 ゼラチン・シルバー・プリント ©Shimpei Takeda

※作品はいずれも作家蔵

関連イベント

関連イベントとして、作家とゲストによる対談を予定しています。詳細は決定次第ホームページでお知らせします。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日14:00より。展覧会チケット（当日消印）をご持参ください。

事業内容は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。

ウジェーヌ・アジェのインスピレーション（仮称）

時代を超えて波及するアジェのスピリット

Eugène Atget's Inspiration The Influence of Atget's Spirit Transcends Time（Tentative）

3F 2017.12.2｜土｜- 2018.1.28｜日｜

写真表現の歴史において燦然（さんぜん）と輝くウジェーヌ・アジェ。当館では開館当初からアジェ作品を収集、現在では150点をコレクションし、開館以来様々な切り口でアジェ作品を紹介してきました。本展では、アジェがこの世に遺した20世紀前後に捉えたパリの光景の写真が、なぜ多くの写真家たちに影響を与え、魅了してやまないかを考察します。現在に至るまで長きにわたって受け継がれてきたアジェのスピリットとはいったい何なのか、当館の多彩なコレクションを中心に、アジェ自身の作品と、その後に続く作家たちの作品によって検証します。

ウジェーヌ・アジェ

1857年、フランス南西部リブルヌに生まれる。幼い頃に両親を亡くして孤児となる。1879年、パリ国立演劇学校に入学するが、兵役のため中退。1887年頃にフランス北部ソンムに移り住む。写真を始めたのはこの頃と推測される。1890年初頭、パリに戻ったアジェは、アパートのドアに「芸術家のための資料」という看板を掲げて写真を売り始めた。その中で、19世紀に世界の首都として繁栄を極めたパリの古き良き部分が、次第に失われてゆくのを目の当たりにし、1890年の終わり頃から写真によるパリのコレクションを始める。1925年、マン・レイのアシスタントであったベレニス・アボットと出会い、アジェはシュルレアリスムの芸術家から高い評価を受ける。1927年のアジェの死後、遺された作品はアボットらにより、1930年に初の写真集『アジェ－パリの写真家』として、フランスとアメリカで出版された。

トリニ館、ケ・ダンジュ通り11番地 1902年 鶏卵紙

フルーリー街76番地、シャペル大通り 1921年 ゼラチン塩化銀紙（P.O.P）

出品予定作家

ウジェーヌ・アジェ、マン・レイ、ベレニス・アボット、ウォーカー・エヴァンズ、リー・フリードランダー、森山大道、荒木経惟 ほか

関連イベント

決定次第ホームページでお知らせします。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日14:00より。展覧会チケット（当日消印）をご持参ください。

［主催］東京都 東京都写真美術館
［観覧料］一般 600（480）円／学生 500（400）円／中高生・65歳以上 400（320）円 ※（ ）は20名以上の団体料金
※年末年始の開館日等は本誌スケジュール下およびホームページをご覧ください。

最新の上映スケジュールはこちら▶

1F 『世界でいちばん美しい村』

大地震を乗り越えて、強く生きる。家族と人々の絆を感じるあたたかな日常。

2015年4月、約9,000人の犠牲者を出したネパール大地震。写真家 石川梵は震災直後、ジャーナリストとして初めて現地へ入り、ヒマラヤ奥地の震源地・ラプラック村に辿り着いた。壊滅した村で石川はひとりの少年と出会った。澄んだ瞳をした、14歳のアシュバドル。彼の村を想う気持ちに石川もまた思いを寄せ、別れ際、二人はふたつの約束をした。ひとつは、また村に戻ってくること。そしてもうひとつは、この孤立した村の惨状を世界に伝えること―。貧しくても明るい家族、子どもたちの輝く眼差し、寄り添うように生きる村人たち、そして祈り。そこには、忘れていた人間本来の生き方があった。

©Bon Ishikawa

［上映期間］2017.8.11（金・祝）- 9.8（金） ［上映時間］13:00／15:30
［休映日］2017.8.14（月）、8.21（月）、8.28（月）、9.4（月）
［料金］当日券：一般1,800円、学生1,500円、シニア・中学生以下・障がい者手帳をお持ちの方1,100円 各種割引あり

〈お問い合わせ先〉
太秦株式会社 03-5367-6073
〈映画公式サイト〉
himalaya-laprak.com

1F 『DARK STAR H・R・ギーガーの世界』

魂の深い闇の中、孤独に輝く星がある―
「エイリアン」造形の産みの親、孤高のアーティストの生涯に迫るドキュメンタリー

『エイリアン』（1979年／リドリー・スコット監督）の造形で、1980年のアカデミー視覚効果賞を受賞したスイスの画家・デザイナーのH・R・ギーガー。その作品は世界中のファンを魅了し、数々のアルバム・ジャケットにも使用され、多くのアーティストたちに影響を与えてきた。6歳の時に父親にプレゼントされた頭蓋骨や、博物館でのミイラの恐怖といった創作の源泉、3人の女性のパートナーとの出会い。そしてもちろん『エイリアン』誕生秘話も語られる。「H・R・ギーガー財団」公認、稀有のアーティストのドキュメンタリー。

©2015 T&C Film ©2015 FRENETIC FILMS.

［上映期間］2017.9.9（土）- 10.1（日）
［上映時間］【9月9日- 9月18日】10:30／12:45／15:30／18:30
【9月20日- 9月24日】10:30／12:45／15:30 【9月26日-10月1日】10:30の回のみ
［休映日］2017.9.11（月）、9.16（土）、9.19（火）、9.25（月）
［料金］当日券：一般1,800円、学生1,500円、シニア・中学生以下・障がい者手帳をお持ちの方1,100円 各種割引あり

〈お問い合わせ先〉
boid 03-3203-8282
〈映画公式サイト〉
gigerdarkstar.com

各種割引	以下の方は当日料金が割引になります。 当館パスポート会員証提示、当館での展覧会・映画の半券提示、三越カード・伊勢丹カード・アトレビュー Suicaカード提示、（公財）東京都歴史文化財団が管理する施設の友の会会員証・年間パスポート提示 ※上映によって割引料金が異なります。詳細はお問い合わせください。

事業内容は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

写真集のほかにもデザイン雑貨も充実のミュージアム・ショップ。カメラグッズのほか、本にまつわるグッズも多数展開中です。読書の秋にそっと彩りを。

詳細ページはこちら▼

木からできたブックカバー 文庫用	270円
眼鏡ブックマーカー	756円
コスモスブックマーカー	648円
読む時間 アンドレケルテス	2,376円

（価格はすべて税込）

営業時間／10:00-18:00（木・金は20:00まで）
TEL／03-6447-7684
定休日／毎週月曜日（そのほか美術館の休館日に準じます）

1F CAFE
カフェ

MAISON ICHI

BOULANGER-PATISSIER-TRAITEUR-CHARCUTIER

LUNCH MENU（11:30-15:00）

本日のキッシュ（自家製パン付き）	1,080円
スペルト小麦田舎パンのクロックマダム	1,080円
冷製ローストビーフのプレート（自家製パン付き）	1,296円

詳細ページはこちら▼

自家製パン、ドリンクはお持ち帰りできます

キッシュ単品（サーモンとほうれん草、紅ズワイガニとブロッコリー、トマトとバジル モッツァレラチーズのキッシュ ほか）	各538円
スペルト小麦の田舎パン 1/4サイズ 430円 ホール	1,620円
コーヒー 540円／エスプレッソ 432円／カプチーノ 540円	

メニューは予告なく変更される場合があります。（価格はすべて税込）

営業時間／10:00-19:00（木・金は20:00まで）
TEL／03-6277-3862　定休日／毎週月曜日（そのほか美術館の休館日に準じます）

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン（株）
（株）資生堂
全日本空輸（株）
（株）ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン（株）
大日本印刷（株）
凸版印刷（株）
富士フイルム（株）
（株）リコー

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス（株）
サッポロ不動産開発（株）
サッポロホールディングス（株）
トヨタ自動車（株）
（株）パラゴン

《支援会員》
（株）I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険（株）
アオイネオン（株）
（株）AOI Pro.
（株）アサツー ディ・ケイ
旭化成（株）
朝日新聞社
（株）朝日新聞出版
朝日生命保険（相）
アスクル（株）
（有）アスペン/POLARIS
（株）アートよみうり
（株）アマナ
（株）岩波書店
ウェスティンホテル東京
（株）潮出版社
内田写真（株）
（株）栄光社
（株）エージーピー
（株）エスジー
（株）ADKアーツ
（株）NHKアート
NHK営業サービス（株）
（株）NHKエデュケーショナル
（株）NHKエンタープライズ
（株）NHKグローバルメディアサービス
（株）NHK出版
（株）NHKビジネスクリエイト
（株）NHKメディアテクノロジー
エプソン販売（株）
エルメス財団
オリックス（株）
オリンパス（株）
（株）オンワードホールディングス
花王（株）
カシオ計算機（株）
鹿島建設（株）
（株）KADOKAWA
カトーレック（株）
神奈川新聞社
（株）かんぽ生命保険
（株）キクチ科学研究所
（株）キタムラ
キッコーマン（株）
（株）紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷（株）
（一社）共同通信社
協和発酵キリン（株）
空港施設（株）
（株）久米設計
グローリー（株）
ケンコー/トキナー/スリック
興亜硝子（株）
（株）弘亜社
（株）廣済堂
（株）講談社
（株）光文社
（株）国書刊行会
（株）コスモスインターナショナル
（株）コーセー
コダック（合）
コダックアラリスジャパン（株）
（株）コバヤシ
小山登美夫ギャラリー（株）
（株）ザ・アール
三機工業（株）
産経新聞社
サントリーホールディングス（株）
（株）サンライズ
（株）ジェイアール東日本企画
JSR（株）
JXホールディングス（株）
ジェイティービー印刷（株）
（株）シグマ
（株）実業之日本社
信濃毎日新聞社
（株）写真弘社
写真の学校／東京写真学園
シャネル（株）
（株）集英社
（株）主婦と生活社
（株）主婦の友社
（株）小学館
城西国際大学メディア学部
松竹（株）
信越化学工業（株）
（株）新潮社
（株）スタジオアリス
（株）スタジオエムジー
（株）スタジオジブリ
スターツ出版（株）
（株）SUBARU
住友化学（株）
住友生命保険（相）
（株）スリーボンド
（株）生活の友社
セイコーホールディングス（株）
（株）青春出版社
成美製版（株）
積水ハウス（株）
双日（株）
ソニー（株）
損害保険ジャパン日本興亜（株）
第一生命保険（株）
第一法規（株）
（株）ダイケンビルサービス
大成建設（株）
（株）大丸松坂屋百貨店
大和証券（株）
（有）タカ・イシイギャラリー
高砂熱学工業（株）
（株）髙島屋
（株）宝島社
（株）竹中工務店
玉川大学芸術学部
（株）タムロン
（株）丹青社
千葉商科大学政策情報学部
（株）中央公論新社
中外製薬（株）
帝人（株）
（株）TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム（株）
（株）テレビ朝日
（株）テレビ東京
電源開発（株）
（株）電通
東亜建設工業（株）
東映（株）
東急建設（株）
東京海上日動火災保険（株）
東京急行電鉄（株）
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
（株）東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
東京テアトル（株）
東京都競馬（株）
（株）東京ドーム
（株）東京美術倶楽部
（株）東京ニュース通信社
（学）専門学校 東京ビジュアルアーツ
東京メトロポリタンテレビジョン（株）
（株）東芝
東宝（株）
（株）東北新社
（株）東洋経済新報社
東洋熱工業（株）
（株）トキワ
（株）徳間書店
戸田建設（株）
（株）トロンマネージメント
（株）ニコンイメージングジャパン
日外アソシエーツ（株）
日油（株）
日活（株）
（株）日経BP
日光ケミカルズ（株）
日産自動車（株）
（株）日本カメラ社
日本空港ビルデング（株）
日本経済新聞社
（株）日本廣告社
（公社）日本広告写真家協会
日本コルマー（株）
（株）日本色材工業研究所
日本写真印刷（株）
（公社）日本写真家協会
（公社）日本写真協会
日本写真芸術専門学校
（一社）日本写真文化協会
日本大学芸術学部
日本たばこ産業（株）
日本テレビ放送網（株）
（株）ニッポン放送
日本ロレックス（株）
（株）ニューアートディフュージョン
ノーリツ鋼機（株）
野村證券（株）
（株）博報堂
（株）博報堂DYメディアパートナーズ
（株）博報堂プロダクツ
（株）パス・コミュニケーションズ
（株）ハースト婦人画報社
（株）ハーツ
パナソニック（株）
パリ ミキ
ぴあ（株）
ビービーメディア（株）
北海道 写真の町東川町
東日本旅客鉄道（株）
光写真印刷（株）
（株）ピクトリコ
（株）美術出版社
（株）ビックカメラ
（株）ビデオプロモーション
ヒノキ新薬（株）
（株）ピラミッドフィルム
（株）ファーストリテイリング
（株）フェドラ
（株）フジテレビジョン
（株）双葉社
（株）プラザクリエイト
（株）プリンスホテル
（株）フレームマン
（株）文化工房
（株）文藝春秋
（株）ベネッセホールディングス
ベルボン（株）
北海道新聞社
（株）ホテルオークラ東京
（株）堀内カラー
本田技研工業（株）
毎日新聞社
（株）マガジンハウス
丸善（株）
マルミ光機（株）
（株）マンダム
（株）みずほ銀行
三井住友海上火災保険（株）
三井倉庫ホールディングス（株）
三井不動産（株）
（株）三越伊勢丹 三越恵比寿店
三菱地所（株）
三菱製紙（株）
三菱倉庫（株）
三菱電機（株）
三菱UFJ信託銀行（株）
（株）ミルボン
武蔵大学
明治安田生命保険（相）
森ビル（株）
ヤマトロジスティクス（株）
横河電機（株）
（株）吉野工業所
（株）ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン（株）
ライカカメラジャパン（株）
リコーイメージング（株）
リシュモン ジャパン（株）モンブラン
（株）良品計画
（株）ロボット
（株）ワコウ・ワークス・オブ・アート
（株）ワコール
（株）ワッツ オブ トーキョー

（株）＝株式会社、（相）＝相互会社、（有）＝有限会社、（学）＝学校法人、（公社）＝公益社団法人
（同）＝合同会社、（一社）＝一般社団法人

（平成29年7月現在・五十音順）

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

	3F	2F	B1F	1F
2017 8	総合開館20周年記念 TOPコレクション コミュニケーションと孤独 ー平成をスクロールする 夏期 (収) 7.15(土)-9.18(月・祝)	総合開館20周年記念 荒木経惟 センチメンタルな旅 1971−2017− 7.25(火)-9.24(日)	エクスパンデッド・ シネマ再考 (収) 8.15(火)-10.15(日)	『世界でいちばん美しい村 石川梵、 初のドキュメンタリー映画』 8.11(金・祝)-9.8(金)
9				『ダンサー、 セルゲイ・ポルーニン 世界一優雅な野獣』 8.19(土)-9.8(金)
10	総合開館20周年記念 TOPコレクション シンクロニシティ ー平成をスクロールする 秋期 (収)	長島有里枝 そしてひとつまみの 皮肉と、愛を少々。 9.30(土)-11.26(日)	写真新世紀 東京展 2017 10.21(土)-11.19(日)	『DARK STAR H・R・ギーガーの世界』 9.9(土)-10.1(日)
11	9.23(土・祝)-11.26(日)		※本誌91号で告知した「第18回上野彦馬賞」展(B1F)は事情により中止となり、「写真新世紀東京展2017」展の会期が変更となりました。最新のスケジュールはホームページをご覧ください。	
12	ウジェーヌ・アジェの インスピレーション 時代を超えて波及する アジェのスピリット(仮称) (収)	日本の新進作家vol.14 増殖する共振: 無垢と経験の写真(仮称)		
2018 1	12.2(土)-2018.1.28(日)	12.2(土)-2018.1.28(日)		

(収)「ぐるっとパス 2017」対象の展覧会　「ぐるっとパス 2017」の詳細はこちら ▶

割引料金について

割引対象

展覧会を割引料金にてご観覧いただけます

1.20名以上の団体のお客様　観覧料が2割引
2.各種会員の方　観覧料が2割引
　□アトレビューSuicaカード
　□MIカード(三越伊勢丹グループのクレジットカード)
　□ウエルカムカード(訪日外国人向けの割引カード)
　□当館映画鑑賞券提示者
　□財団他館友の会、年間パスポート会員
　□JR東日本「大人の休日倶楽部」カード
3.親子ふれあいデー(毎月第3土曜日と引き続く日曜日が対象)
　観覧料が5割引
　□都民で18歳未満のお子様を連れたご家族が対象です。
　　※詳しくはお問い合わせください。

無料対象

展覧会を無料でご観覧いただけます

1.□小学生以下
　□障がい者手帳提示者及びその介護者(2名まで)
　□被爆者手帳提示者及びその介護者(2名まで)
　□愛の手帳・療育手帳提示者及びその介護者(2名まで)
　□精神障害者福祉手帳提示者及びその介護者(2名まで)
　□東京都内在住・在学の中学生
※教育活動(スクールプログラムなど)で当館をご観覧
　希望の生徒と引率者は事前申告が必要です。
　当館までお問い合わせください。

2.シルバーデー(毎月第3水曜日)
　□65歳以上の方　※証明できるものの提示が必要です

東京都写真美術館　年間パスポート「TOP MUSEUM PASSPORT 2017」発売中

当館の展覧会を無料または割引でご観覧いただけるお得なパスポートです。

販売価格:3,240円(税込) 有効期間:2017年4月1日(土)より2018年3月31日(土)
販売場所:当館1F総合受付　特典等の詳細は、当館ホームページのご利用案内よりご確認ください。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場を御利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00-18:00(木・金は20:00まで)。入館は閉館の30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日休館)、12月29日-2018年1月1日 ※最新情報はホームページをご確認ください。

東京都写真美術館ニュース「アイズ17」92号 □発行日:2017年8月26日／企画・編集:東京都写真美術館事業企画課 普及係 □印刷・製本:株式会社公栄社 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2017 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。